

『万葉集』の魅力と「令和」にちなんで

北川 和秀

1. 大宰府とは

- ①九州に置かれた朝廷の出先機関で、「遠の朝廷」と呼ばれた。
- ②博多湾から南東に十五キロメートルほど入った内陸に位置し、すぐ北の大野山（現在は四王寺山）には大野城が築かれ、西には水城が築かれていた。
- ③大宰府の役目は、九州諸国の行政の統括、外交、国防。
- ④長官は大宰帥といい、官位相当は従三位。奈良時代には大納言または中納言の兼任が多い。中納言で兼任した場合は現地に赴く。梅花の宴の折の大宰帥は大伴旅人。



(『国史大辞典』(吉川弘文館)「筑前国」の付図から)

2. 梅花の歌三十二首とは

- ①天平二年正月十三日に大伴旅人邸で催された梅花の宴でよまれた歌。
- ②参加者は大宰府の役人と九州諸国の役人、合計三十二名で、一人一首ずつの歌が記録されている。

③参加者

32	小野氏淡理	不明	小野田守か
31	筑前掾門氏石足	筑前国の三等官	門部石足
30	小野氏国堅	不明	
29	土師氏御道	不明	
28	薩麻目高氏海人	薩摩国の四等官	高向老か
27	対馬目高氏老	対馬国の四等官	
26	杵岐目村氏彼方	杵岐国の四等官	
25	筑前目田氏真上	筑前国の四等官	田辺真上か
24	大隅目榎氏鉢麻呂	大隅国の四等官	
23	算師志氏大道	大宰府の役人（計算官）	志紀大道か
22	陰陽師礪氏法麻呂	大宰府の役人（陰陽師）	
21	薬師高氏義通	大宰府の役人（医師）	
20	小令史田氏肥人	大宰府の役人（書記官）	
19	大令史野氏宿奈麻呂	大宰府の役人（書記官）	小野宿奈麻呂か
18	神司荒氏稲布	大宰府の役人（神事官）	
17	杵岐守板氏安麻呂	杵岐国の長官	板持安麻呂か
16	筑前介佐氏子首	筑前国の次官	佐伯子首か
15	薬師張氏福子	大宰府の役人（医師）	張福子（渡来人）
14	大判事丹氏麻呂	大宰府の役人（司法）	
13	小典山氏若麻呂	大宰府の四等官	山口若麻呂
12	大典史氏大原	大宰府の四等官	
11	小監土氏百村	大宰府の三等官	土師百村
10	小監阿氏奥島	大宰府の三等官	阿倍息島か
9	大監伴氏百代	大宰府の三等官	大伴百代
8	主人（大伴旅人）	大宰府の長官	
7	笠沙弥（沙弥満誓）	造觀世音寺司別当	
6	筑後守葛井大夫	筑後国の長官	
5	豊後守大伴大夫	豊後国の長官	
4	筑前守山上大夫	筑前国の長官	
3	小式粟田大夫	大宰府の次官	
2	小式小野大夫	大宰府の次官	
1	大式紀卿	大宰府の次官	



3. 大宰府時代の大伴旅人

西暦	年号	天皇	執政	事項	年齢
七二七	神亀	四	長屋王	暮の頃、正三位中納言大伴旅人、大宰帥兼任。	63
七二八	五			四月初め頃、旅人の妻死去 七月二十一日、山上憶良の日本挽歌	64
七二九	天平	元	藤原武智麻呂	二月十二日、長屋王自尽。 三月四日、藤原武智麻呂、大納言任官 六月二十日、背に「天王貴平知百年」の龜献上 八月五日改元。八月十日、光明子立后 一月十三日、大伴旅人の宅で梅花の宴	65
七三〇	二			十二月、大伴旅人、大納言に任官、帰京 一月二十七日、大伴旅人、従二位昇進	66
七三一	三			七月二十五日、大伴旅人没	67

4. 梅花の歌の序文

○本文、訓読文、口語訳は別紙参照。

・梅花の宴が開催された天平二年一月十三日は、現在の太陽暦では七三〇年二月八日。立春はこの三日前の一月十日（太陽暦では二月五日）

5. 帰田賦と蘭亭序

① 帰田賦……後漢の官人・文人・科学者である張衡（七八〜一三九年）が作った賦。

『礼記』や『詩経』の影響を強く受けている。永和三年（一三八）の成立か。官職を辞し、田舎の穏やかな自然の中で暮らし、書を読み、文筆に勤しもうという内容。六世紀に編纂された『文選』に収録されている。

② 蘭亭序……東晋の時代、永和九年（三五三）三月三日に、王羲之は名士を蘭亭（浙江省紹興市の南西にあった亭）に招き、四十二名で曲水の宴を開いた。その時に作られた詩二十七編（蘭亭集）の序文として王羲之が書いたもの（草稿）。書の名品として知られる。

※両者の成立がともに「永和」年間というのは全くの偶然。

③ 蘭亭序と梅花宴序とは趣旨が共通。

・永和九年、歳在癸丑。暮春之初、会于会稽山陰之蘭亭。脩禊事也。（蘭亭序）
（永和九年、歳は癸丑に在り。暮春の初め、会稽山陰の蘭亭に会す。禊事を脩むるなり。）

・天平二年正月十三日、萃于帥老之宅、申宴会也。（梅花宴序）

（天平二年正月十三日、帥の老の宅に萃まり、宴会を申ぶ。）

④ 蘭亭序と梅花宴序とは字句の似た部分もある。

・是日也、天朗氣清、惠風和暢。（是の日、天朗らかに氣清く、惠風和暢せり。）

・于時、初春令月、氣淑風和。（時に、初春の令月にして、氣淑く風和らぐ。）

⑤ 帰田賦と梅花宴序とは字句のよく似た部分がある。

・於是、仲春令月、時和氣清。（ここに、仲春の令月にして、時和らぎ氣清し。）

・于時、初春令月、氣淑風和。（時に、初春の令月にして、氣淑く風和らぐ。）

6. 『万葉集』における題詞と序文

① 歌の前に題詞の付いている作品は多い。

柿本朝臣人麻呂の歌一首

・淡海の海夕波千鳥汝が鳴けば情もしのに古思ほゆ（三・二六六）

天皇、内大臣藤原朝臣に詔して、春山の万花の艶と秋山の千葉の

彩とを競憐はしめたまふ時、額田王、歌を以ちて判る歌

・冬ごもり 春さり来れば 鳴かざりし 鳥も来鳴きぬ 咲かざりし 花も咲けれ

ど 山を茂み 入りても取らず 草深み 取りても見ず 秋山の 木の葉を見て

は 黄葉をば 取りてそしのふ 青きをば 置きてそ歎く そこし恨めし 秋山

われは（一・一六）

② 題詞と歌との間に漢文の序のある歌もある（ただし、序文のある作品はほぼ巻五に限定。他巻では大伴家持（旅人の子息）や大伴池主の作にわずかにある程度）

子等を思ふ歌一首 序を并せたり

釈迦如来い、金口に正に説きたまはく、等しく衆生を思ふこと、羅睺羅の如しとのたまへり。又説きたまはく、愛は子に過ぎたりといふこと無しとのたまへり。至極の大聖すら尚し子を愛しふる心あり。況むや世間の蒼生の、誰かは子を愛しびずあらめや。

・瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして徳はゆ 何処より 来りしものそ

眼交にもとな懸りて 安眠し寝さぬ（五・八〇二）

反歌

・銀も金も玉も何せむに勝れる宝子に及かめやも（八〇三）

7. 『万葉集』の梅

① 『万葉集』によまれた植物ベストテン

1 はぎ(萩)	一四一
2 うめ(梅)	一一六
3 たちばな・はなたちばな(橘・花橘)	一〇七
4 すげ・すが・やますげ(菅・山菅)	七四
4 まつ(松)	七四
6 あし(葦)	五五
7 ち・あさぢ(茅・浅茅)	五〇
8 やなぎ・あをやぎ(柳・青柳)	四九
9 ふぢ・ふぢなみ(藤・藤波)	四四
10 さくら(桜)	四一

② 梅は第二位を占め、万葉集に数多くよまれた植物である

③ ただし、植えられている場所は、大宰府や平城京の貴族の庭園などに限られている
④ 東歌には全くよまれていない

⑤ 時代的には奈良時代以降

⑥ 花の色が分かる梅は白梅。香りをよんだ歌は極めて少ない

⑦ 梅は中国からの渡来植物で、まだ広く普及していたわけではない

8. 元号「令和」について(私見)

① 日本の元号なので、国書を典拠にしたのは良いことと思う。ただ、今後、国書に限定する必要はなく、漢籍・国書にこだわらず、良いものを選べば良い。古代日本の元号には文献の典拠のないものが多い。

・大宝、慶雲、和銅、靈龜、養老、神龜、天平、天平感宝、などなど、いずれも喜ばしいことが起こったことに由来する元号。

② 国書である万葉集を典拠にしたとはいえ、当時の国内で最も国際的な場所であった大宰府で開催された梅花の宴(梅は渡来植物)における漢文の序を典拠にしたものであり、梅花宴序には漢籍の影響が大きい。そういったことから、「令和」は、内向きの元号ではなく、外国との国際交流、文化交流をも象徴する元号といえよう。

③ 三十二人の人々が集まって歌を作った。その序文であることにも意味がある。

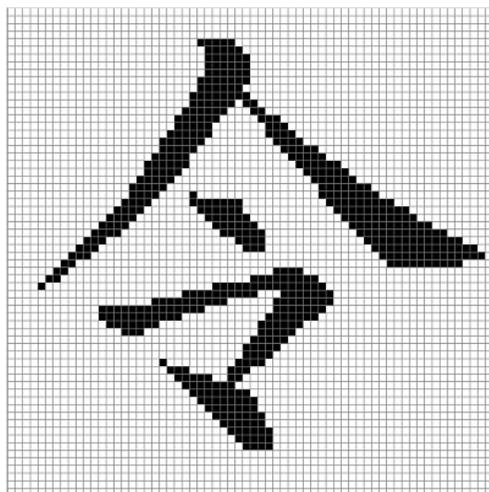
④ 典拠の文脈は「初春令月、気淑風和」(初春の令月にして、気淑く風和らぐ)であり、「令和」は「よい・うるわしい」と「やわらぐ・おだやか」とを組み合わせたものであり、好ましい字義の文字を組み合わせた元号と考える。

⑤ 典拠の文脈を考えずに、「令和」のみを見ると「令和」(和せしむ)とも読めるが、それも「仲良くさせる」「穏やかにさせる」の意で、悪くはない。

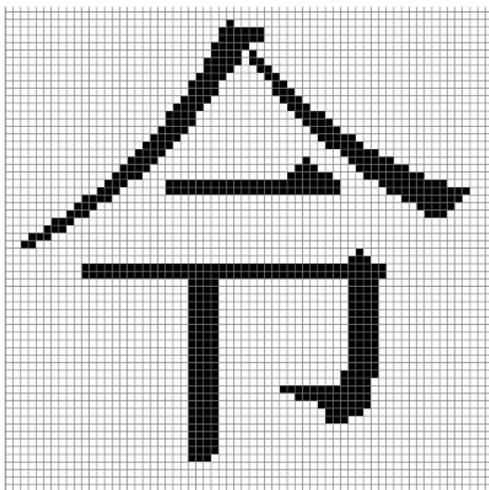


Two examples of the character '令' (rei) in calligraphic styles. The top example is a cursive style with fluid, sweeping strokes. The bottom example is a bold, blocky style with thick, uniform strokes.

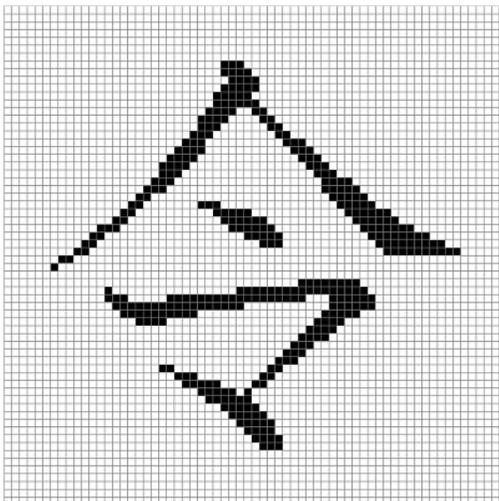
楷書体



明朝体



教科書体



* 文字の形の相違はデザインの相違なので、文字としてはどれも正しい。

☆魅力的な万葉歌

- ① 夏の野の繁みに咲ける姫百合の知らえぬ恋は苦しきものそ（八・一五〇〇）
大伴坂上郎女
- ② 信濃なる筑摩の川の細石も君し踏みてば玉と拾はむ（一四・三四〇〇）信濃東歌
- ③ 磯城島の日本の国に人二人ありとし思はば何か嘆かむ（一三・三二四九）
- ④ 思はぬに到らば妹が嬉しみと笑まむ眉引き思ほゆるかも（一一・二五四六）
- ⑤ 恋ひ恋ひて逢へる時だに愛しき言尽してよ長くと思はば（四・六六一）
大伴坂上郎女
- ⑥ 君が目を見まく欲りしてこの二夜千歳の如く吾は恋ふるかも（一一・二三八一）
柿本人麻呂歌集
- ⑦ 梳も見じ屋中も掃かじ草枕旅行く君を齋ふと思ひて（一九・四二六三）
- ⑧ 君が行く海辺の宿に霧立たば吾が立ち嘆く息と知りませ（一五・三五八〇）
遣新羅使人の妻
- ⑨ 草枕旅行く君を人目多み袖振らずしてあまた悔しも（一二・三一八四）
- ⑩ 蘆垣の隈処に立ちて吾妹子が袖もしほほに泣きしそ思はゆ（四三五七）上総防人
- ⑪ 色深く背なが衣は染めましを御坂たばらばま清かに見む（四四二四）
武蔵防人の妻
- ⑫ 君が行く道のながてを繰り畳ね焼きほろぼさむ天の火もがも（一五・三七二四）
狭野弟上娘子
- ⑬ 福のいかなる人か黒髪さきはひの白くなるまで妹が声を聞く（七・一四一一）
- ⑭ 我が背子を何処行かめとさき竹の背向そがひに寝しく今し悔しも（七・一四一二）
- ⑮ つぎねふ 山背道やましろちを 他夫ひとづまの 馬より行くに 己夫おのづまし 歩あちより行けば 見るごとに
哭なのみし泣かゆ 其思そこふに 心し痛し たらちねの 母が形見と わが持てる真澄まそみ
鏡かがみに 蜻蛉領巾あきづひれ 負おひ並め持ちて 馬買へわが背（一三・三三二四）
- ⑯ 真澄鏡まそみがみ持てれどわれは 駈しるしなし君が歩あち行よりなづみ行く見れば（三三一六）
- ⑰ 馬買はば妹歩行かちならむよしゑやし石は履ふむとも吾は二人行かむ（三三一七）
- ⑱ 唐衣裾からころひに取りつき泣く子らを置きてそ来ぬや母なしにして（四四〇一）信濃防人
- ⑲ 旅人の宿りせむ野に霜降らばわが子羽はぐくめ天の鶴群たづむら（九・一七九一）遣唐使の母
- ⑳ 天の海に雲の波立ち月の舟星の林に漕ぎ隠る見ゆ（七・一〇六八）柿本人麻呂歌集

【本文】

梅花 譚卅二首 并序

天平二年正月十三日

萃于帥老之宅 申宴会也

于時 初春令月 氣淑風和

梅披鏡前之粉

蘭薰珮後之香

加以

曙嶺移雲 松掛羅而傾蓋

夕岫結霧 鳥封穀而迷林

庭舞新蝶

空歸故雁

於是

蓋天坐地

促膝飛觴

忘言一室之裏

開衿煙霞之外

淡然自放

快然自得

若非翰苑 何以攄情

詩紀落梅之篇

古今夫何異矣

宜賦園梅聊成短詠

【訓読文】

梅花の歌三十二首 序を并せたり

天平二年正月十三日、

帥の老の宅に萃まり、宴会を申ぶ。

時に、初春の令月にして、氣淑く風和らぐ。

梅は鏡前の粉を披き、

蘭は珮後の香を薫らす。

加之、

曙の嶺に雲を移し、松は羅を掛けて蓋を傾け、

夕の岫に霧を結び、鳥は穀に封されて林に迷ふ。

庭には舞ふ新蝶あり、

空には帰る故雁あり。

ここに、

天を蓋とし地を坐とし、

膝を促け觴を飛ばす。

言を一室の裏に忘れ、

衿を煙霞の外に開く。

淡然として自ら放にし、

快然として自ら足る。

若し翰苑に非ざれば、何を以てか情を攄べむ。

詩に落梅の篇を紀す。

古今それ何ぞ異ならむ。

宜しく園梅を賦みて、聊かに短詠を成すべし。

【口語訳】

梅花の歌三十二首 序文を加えた

天平二年正月十三日、

大宰帥の老の屋敷に集まって、宴会を開く。

折しも、初春の良い月で、大気は澄んで風は穏やかだ。

梅は、鏡台のおしろいのように白く咲き、

蘭は、玉佩を着けた人とすれ違ったときのように香る。

さらには、

明け方の峰には雲がたなびき、松は薄物を纏って傘を

差し掛けたようであり、

夕方の山の洞からは霧が湧き立ち、鳥は霧の帳に閉じ

込められて林の中を飛び迷う。

庭には春に生まれた蝶が舞い、

空には去年の秋に來た雁が帰ってゆく。

ここに、

天空を傘とし、大地を敷物としてくつろぎ、

膝を寄せ合って、盃を巡らせる。

一堂に会して、内には言葉も不要なほどに打ち解け、

外には良い景色に向かって襟をくつろげる。

心は淡々として自由であり、

気分は快く満ち足りている。

文筆以外の何によつてこの思いを述べ尽くせようか。

昔の中国には落梅の漢詩がある。

昔と今と、中国と日本と、何の違いがあるうか。

さあ、この庭園の梅を短歌によもうではないか。